

研究論文

## 共創型授業における社会人活用の展開

大橋 眞<sup>1)</sup>・斎藤隆仁<sup>1)</sup>・佐藤高則<sup>1)</sup>・中恵真理子<sup>1)</sup>・田村貞夫<sup>2)</sup>・Loise Mamaena Idu<sup>3)</sup>

(1) 徳島大学・総合科学部、(2) 徳島県心身障害者福祉会  
(3) Namona' ako Community School, Solomon Islands

概要：徳島大学全学共通教育では、平成17年度より地域の社会人を活用して体験を取り入れた共創型授業を実施している。『身近な福祉を見て・知って考えてみる』では、障害者福祉だけでなく、教育改革、生命倫理、太平洋戦争、日本国憲法など幅広い視野から福祉を考える授業を、社会人を加えた共創型学習科目として実施した。通常の授業では、学生の側から意見を出し合うことには限界があるが、今回の共創型学習科目は、学生の側から出た意見を中心に、社会人を交えて討論する形で展開することが出来た。また、『「つたえること」と「ものづくり」—科学で遊ぼう—』、『「つたえること」と「ものづくり」—あいのメッセージ—』では、ものづくりを素材としたグループ学習を行い、必要に応じて社会人を含めた討論を行う形式の授業を行った。その結果、様々な項目において教員とは違った視点からの意見を学生から引き出す役割を社会人が担っていることがわかった。また、このような社会人活用の効果が、専門的人材の不足する開発途上国の教育においても有効であることを検証する目的で、深刻なマラリア流行地であるソロモン諸島国マライタ島の小学校において、現地の定年退職者などを活用した共創型授業を行った。野外での体験学習を通じて、マラリア媒介蚊の生息を明記したリスクマップを作成した。その結果、児童たちだけではなく、教員や社会人自身にも良い刺激となったという反応があり、児童に対する教育だけでなく地域社会の衛生環境の向上に貢献できる新たな教育法であることが示された。

(キーワード：地域、社会人活用、共創型学習)

### A trial engagement of men of ability as a teaching staff from the local community in the practical educational program for mutual creativity development

OHASHI Makoto, SAITO Takahito, SATO Takanori, NAKAE Mariko, TAMURA Sadao, MAMAENA IDU Loise  
(Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima, Cooperation for the Disabled Persons Welfare in Tokushima Prefecture, Namona' ako Community School, Solomon Islands)

For a new educational program in the General Education Course of the University of Tokushima, called "Mutually Creative Development by Practical Lecture", we recruited assistant teaching staff from the local community from 2005. In the program "Experience, understand and put the welfare system of the community into practice", we studied various subjects such as "Disabled persons' welfare", "Reform of education", "Bioethics", "The pacific war" and "Constitution of Japan". In this class we made continuous efforts to have bi-directional communications between students and teaching staffs. In the other class "Handicraft and social communication—introduction to science" and "Handicraft and social communication—message of Ai", we focused on the making of handicrafts with group discussions. The assistant staff played important roles on the group discussion as leaders of the group. Students got to know the assistant staff well, resulting in the active discussions in the class. To apply this educational program to the developing countries, we tried a similar program focused on "malaria" disease in the primary school class of Solomon Islands, one of the holoendemic areas of this disease. In the course of a field study, a risk map was made to indicate the habitat distribution of anopheline mosquitoes, the vector of malaria parasites. Not only school children but also school teachers and assistant teaching staff were satisfied with the program. Thus, this new educational program was verified to contribute toward developing the community health as well the health education for primary school children.

(key words: community, assistant teaching staff from the local community, educational program for mutual creativity development)

#### 1. 背景

現在の日本では、少子高齢化社会に伴う大学教育のユニバーサル化、グローバル化などの問題を抱えている。これに関連して、学生の勉学に対す

るモチベーションの低下が懸念されており、大学教育の改革が急務の課題となっている。一方では、ここ数年でいわゆる団塊の世代の定年退職者を大量に生み出そうとしている。今日のような大学全

入時代とは異なり、団塊の世代の人達には、経済的な理由などにより大学進学を果たせなかった人も多い。生涯教育の充実と、その結果生み出される知的資産の活用は、重要な課題である。このような人達は、社会で活躍してきた専門分野だけではなく、一般的な勉学や社会貢献に対するモチベーションが高いことから、定年後第二の人生として、生涯教育や社会貢献の場での活躍が期待されている。初等中等教育、大学教育の現場において、ボランティア的な形で貢献できる場があれば、知的資産の有効利用につながると考えられる。

一方では、学習の機会がありながら、勉学に対するモチベーションの低さから学習に躓く学生も増加している。有能で高いモチベーションを持ち合わせた社会人を起用して、授業の充実を図るこ

とは、大学教育の改革、とりわけ共通教育における社会性形成に関する科目では重要な課題の一つである。本稿では、共通教育の中で定年退職をした社会人を社会人講師として活用している共創型学習『身近な福祉を見て・知って考えてみる』(図1左、右)を中心にその意義を検証したい。また、その他の共創型学習『「つたえること」と「ものづくり」—あいのメッセージ—』(図1左下)、共創型学習『「つたえること」と「ものづくり」—科学で遊ぼう—』(図1右下)についても、社会人の果たす役割について取り上げる。さらに、同様の趣旨で定年退職者および地域住民を活用して、ソロモン諸島国の地方の小学校で実施された総合型学習『マラリアを考える』についても比較の対象として検討したい。



図1 全学共通教育の共創型授業風景

〔左上〕身近な福祉を見て・知って・考えてみる 〔右上〕精神障害者施設訪問(課外授業)  
 〔左下〕「つたえること」と「ものづくり」—あいのメッセージ— 〔右下〕「つたえること」と「ものづくり」—科学で遊ぼう—

## 2. 方法

### ①アンケート調査

授業の最後に受講生全員に対して無記名形式で行った。基本的には、各授業で共通な各項目を5段階で評価してもらった。また、「身近な福祉を見て・知って・考えてみる」では、授業の内容に合わせた独自の質問を幾つか用意した。

### ②全般的なねらい

様々な身近な問題について、福祉との関係を考えてみることにより、福祉を幅広い観点から捉える目を養う。その中から福祉とは何かということを改めて問い直してみる。

### ③今年度の主なテーマ

#### a. 障害者福祉

障害者福祉は、狭い意味での福祉の主要なテーマである。障害者施設を訪ねることにより、障害者福祉の問題を自然に感じられるようになる。また、障害者との交流の時間を持つことにより、障害者を身近に感じる事が出来る。授業時間の制約があるため、授業の時間内に障害者施設を訪問することには限界がある。このために、障害者施設訪問は任意参加の課外学習として実施した。任意参加であるにもかかわらず積極的に施設訪問に参加しようとする学生は勉学意欲も高い。このため、高い学習効果が期待できる。しかしながら、これを一歩進めて福祉に対する考えを深めて議論してゆくには、様々な基礎知識が必要となってくる。今年度の施設訪問は徳島県障害者交流プラザのみ授業時間に行い、その他の障害者施設訪問は任意参加とし、次の授業時間はその参加者からの報告を求めて、出来る限り参加者の感動を受講生と共有する事につとめた。

#### b. 教育改革

ゆとり教育の定着を待たずに、競争至上主義と教員免許更新制度の導入など、反ゆとり教育の方向性に向き始めた初等中等教育。新カリキュラム

のゆとり世代と言われる彼らから見た教育改革は、どのように写るのだろうか？異なった世代から見たゆとり教育の見方と共に、問題点の検証とこれから進むべき方向性を考える。

#### c. 生命倫理

クローン技術、遺伝子診断、脳死判定の問題と共に、「先端医療と地域医療をどのようなバランスの上に進めてゆくべきか？」「東洋医学はなぜ大学教育で取り上げられないのか？」というような、幅広い医療のあり方を含めたテーマについて考えることにした。

#### d. 太平洋戦争

日本の歴史の中でも重要な出来事であり、現代の福祉を考える上で重要なテーマであるが、これまで総括してその意味を考えることはほとんどされてこなかった。特に学校教育の現場では、高等学校の教科書でも表面的な事実関係の記述しかされていない。今回、海外で共創型授業を行ったソロモン諸島は、世界史上最も大規模な海戦が繰り広げられ、海岸は日本兵の屍体で埋め尽くされたという。太平洋戦争における戦争責任に関して、明治維新を契機とした国民国家の成立とマスコミの功罪を考える(表1)。

表1 『共創型学習 身近な福祉を見て・知って・考えてみる』の課題の例

「日本はなぜ負ける戦争をしたのか」という課題に関して、各学生の答えは次のようなものであった。あなたの考えに最も近いものに○、最も異なるものに×をつけ、それぞれの答えに対してコメントを付けよ。

- ( ) A君の答え 陸軍が中国への侵略を続ける中で、天皇、政府、官僚がこれを止めることを怠った。
- ( ) B君の答え アメリカからの石油輸入が差し止められ、戦争を始めるのは今しかないという切迫した状況で、海軍が独走して日米開戦に踏み切った。
- ( ) C君の答え 大日本帝国憲法で主権者であった天皇が、満州に植民地国家を樹立するためには、戦争による解決もやむ無しと決断した。
- ( ) D君の答え 欧米の国々が、植民地を広げる中で、日本も植民地を獲得し勢力を広げようとして、深みにはまり込んでいった。
- ( ) E君の答え 大衆の世論が、戦争を支持する流れとなり、マスコミがこれに便乗して、戦争に駆り立てる記事を掲載し続けた。

#### e. 日本国憲法

憲法の意味を歴史的な視点から見なおして、考えてみる。「時代が変わったから」「古くなったから」「押しつけられたものだから」という感情論的なものではなく、法治国家における憲法の役割を考えることにより、改憲論議の本質をみる視点を涵養する。

### 3. 地域社会人の共創型授業での役割

#### ①共創型学習の特色

共創とは、互いに相互作用を及ぼしながら、お互いに創造力を高めてゆく意味がある。様々な視点から、身近な問題点について議論をする中で、新たな視点を発見しこれまでの知識の間につながる新しいネットワークを構築する。議論をする学生も、異なった視点を持った学生が一つの机を囲んで集まることにより、この学習の場において多様な考え方が示されることになる。学生の間では同年代というライバル意識もあり、モチベーションの高揚が期待できる。教員ではない社会人が加わることにより、異なった世代の考え方という新しいバリエーションが、学生間の多様な視点の中に付け加わる事になる。

これに対して教員の考え方が直接学生に提示された場合、教員の考え方が正解のような圧力を与えることになり、学生間の多様な視点は片隅に追いやられる。この結果、これまで学生の間に出てきた多様な視点からの知的創生の芽が、消え去ることが懸念される。このように、学生間で創生された知識のネットワークが発展的な方向を向いている場合には、教員からの意見は最低限にとどめ、社会人の方に積極的な役割を果たしてもらう方が、結果としては、より高いレベルの知的創生が期待できると考えられる。

#### ②地域からの視点の涵養において

社会制度や歴史を検証し、その中に介在する問題点を提起しようとする場合、国家、あるいは国際的な視点からの考え方とともに、地域の側からの視点を併せた双方向的なネットワーク構築が必要である。片側だけの視点で、真相を捉えきれないまま、一つの事実として客観化されている場合

も多い。特に広域で使用される教科書的な記載では、地域の側の視点が欠落しがちである。地域に住む社会人の視点は、どちらかというところこれまでの経験を生かした地域の視点が豊富である。一方、学生はこれまで教科書中心の学習で、国家の視点からの学習を積み重ねてきている。このように社会人の視点を、学生の視点と較べることにより、その視点の違いを知るとともに、多様な視点の重要性を気づかせる効果も期待できる。

このような学習法は、これまで理解をしないまま暗記してきたような興味を持ちにくい科目についても、その重要性に気づき興味を抱かせるきっかけとなる可能性がある。また、これまで学習してきた科目についての問題点も知る機会にもなると考えられる。

#### ③障害者福祉、高齢者福祉の視点から

障害者の問題は、これまで国家レベルの視点では、学んでこなかった学生がほとんどである。むしろ身近な障害者や、高齢者を身近にみてきた経験のある学生も多く、地域の視点からの問題点を感じている。また、障害者施設を訪問することなどにより、地域の具体的な問題点として、障害者福祉を一つのテーマとして捉えることに期待が出来る。

障害者福祉の問題は、このように具体的でわかりやすいテーマとなる結果、学生にとって最も興味を抱く課題となっている可能性がある(図2)。社会福祉に携わってきた社会人は、これまで地域の視点だけではなく、社会制度の問題を数多く体験してきているため、視野を広げる必要のある学生にとって学習の規範となる。また、定年退職をした社会人は、学生よりもはるかに高齢者福祉の問題を身近に感じており、このような視点の存在も学生において障害者福祉への関心を高める要因になっていると思われる。

学生にとっても、高齢者福祉はもっとも身近な福祉問題である。高齢者の親族の存在や親の高齢化問題、さらには自分自身の将来の問題としても、すべての学生に対して共通の関心事項になっている。学生より遙かに年長である社会人が授業に参画することにより、より身近に高齢者福祉を考え

やすい環境となることが期待される。

これに対して、多くの学生にとって身近な問題とは捉えにくい障害者の自立的支援や年金問題は、現代社会の障害者福祉においては重要な課題であるが、これらの問題を単一テーマとして取り上げると、学生の興味を引きつけにくい。

今年度参画した社会人は、数多くの障害者福祉に関する社会活動をボランティアとして行っており、この社会活動を学生に自然な形で語りかけることにより、学生が障害者福祉の問題を身近な問題として捉える機会を提供したと思われる。事実として、単位の要件ではないにもかかわらず約半数の受講生が自主的な福祉施設訪問に参加した。

また、すべての学生が障害者福祉の学習を深めたいという意欲を示した(図2)。

このように障害者福祉の問題は、これまでの教育ではこの分野を専門としない学生にとっては、大学教育で学ぶ機会が少なく、また社会全体としても特殊な問題として捉えられがちな面もある。社会科学、自然科学、人文科学のすべての分野に関わった福祉の分野は、教養科目として重要な位置を占めているが、これまで教養教育としての取り組みは十分とは言えない状況にあった。この分野に関係する多くの社会人が関わることにより、教養教育のための障害者福祉の教育プログラム開発が期待される。

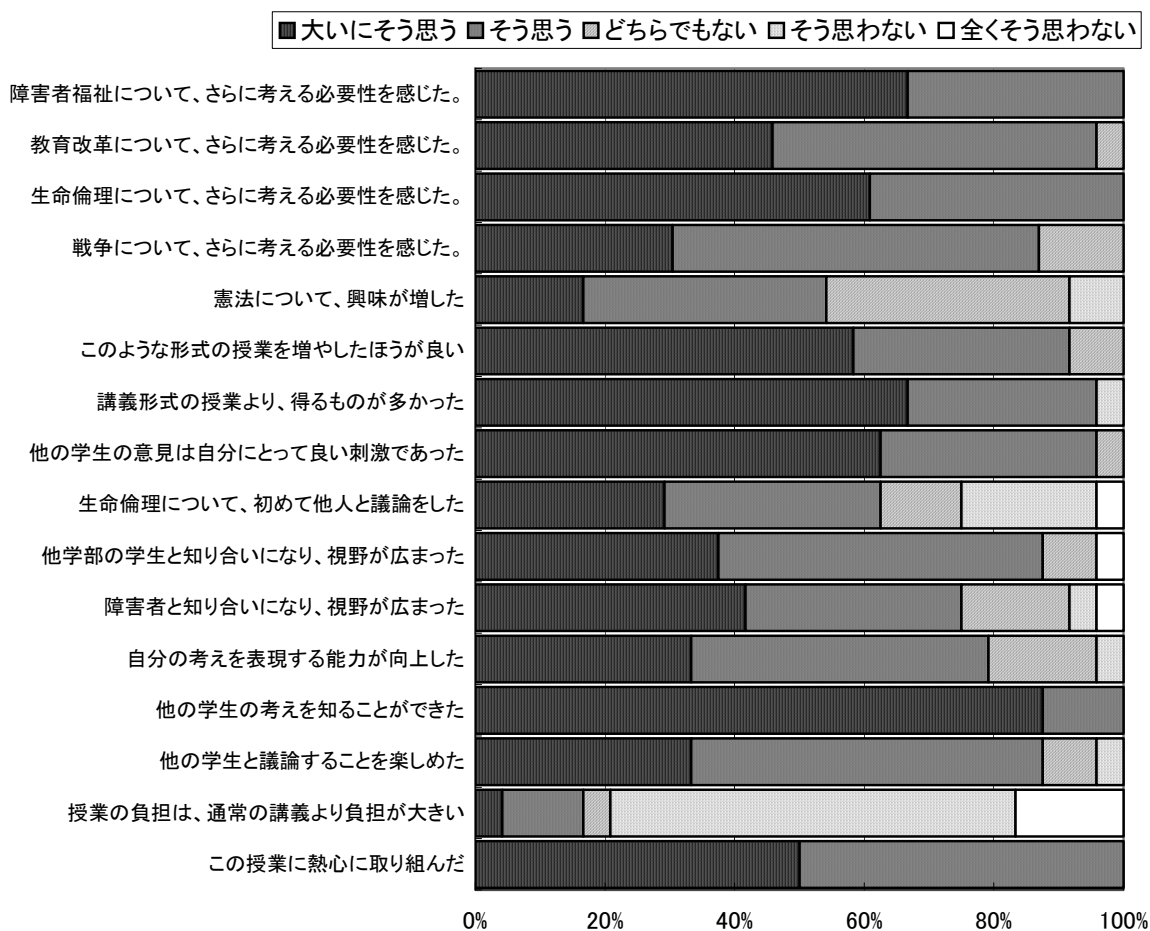


図2 共創型学習「身近な福祉を見て・知って・考えてみる」のアンケート結果

#### ④初等中等教育の新カリキュラム

現在大学1,2年生に在籍している学生の多くは、いわゆるゆとり世代といわれる新カリキュラムで学んだ学生である。かつての大学受験に対す

る負担の多いカリキュラムの弊害を改善する目的で教育内容が精選されると共に、断片化した各教科の関連を総合的に学ぶ目的で設置された総合科目を学んで来ている。

本来ならこの新しいカリキュラムの教育効果の評価は、この新カリキュラムで学んできた学生が、大学における勉学姿勢や社会への適応力などの観点から、これから本格的な評価が始まるはずである。ところがその評価が始まる前から、これまで教科内容の削減の方向で進んできた改革を見直す方向で議論が進行しており、今後の総合科目の行く末については不明な点もある。創造力・応用力の育成のために重要な総合科目の発展のために、今後さらに大学との連携が必要と考えられる。

共創型授業に参加する社会人は、現在の大学1,2年生とは、異なったカリキュラムに基づいて学んできており、さらにこれまで数回行われてきたカリキュラム改正の方向性を理解しているため、現在のカリキュラムに対する率直な意見を持っている。

これに対して、この授業の受講生(学生)にとっては、自分たちの受けてきたカリキュラムがすべてであり、以前のカリキュラムを感覚的に捉えにくい。また、自分たちが学んできたカリキュラムに対して率直な意見を聞く機会も限られている。

学生から出された初等中等教育に関する意見としては、教員の人間的な問題に関するものが多く、教科内容に関する意見は少ない。社会人から出される率直な意見は、学生の側から出されることがなかった教科内容に関するものが主であり、学生が初等中等教育を考えるきっかけとなり、新たな展開につながる可能性がある。

学生にとって、同じ内容の意見が教員から出される場合よりも、身近に感じる社会人からの意見の方がより近い目線からの指摘と感じられる結果、受け入れやすい面がある。この利点を生かした共創型の授業は、社会人の参画により自然な形で話の輪の展開が期待できるなど、社会人が大きな役割を持つと考えられる。

### ⑤生命倫理の問題に関して

受講生のアンケート結果でも、生命倫理に関する議論は今回の授業が初めてという学生は約6割であり、他の項目と比較して抜き出ている(図2)。これは、赤ちゃんポスト、体外受精、脳死問題と臓器移植、体細胞クローンなど、マスコミのなか

でも取り上げられる事が多いため、学生にとって他のテーマに比較して馴染みがあることも一因であると思われる。合計すると約4割の学生はこれまで何らかの形で生命倫理に関する議論に参加するなどの機会があったことになる。

ダウン症のような先天性疾患に対する対策として、羊水の遺伝子診断についての可否が議論されている。医学の発展は、これまで治療法の無かった疾患に対して、治療法開拓への途を開く可能性を持っているが、同時に数多くの新たな生命倫理の問題点が発生することを否定できない。この点は、科学一般の発展がもたらす両面性と共通点が多い。

生命倫理に関する問題は、最近マスコミにおいてもしばしば取り上げられるテーマであるために、学生の知識は必ずしも正確とは言えないものの、用語としての認知度は極めて高い。この分野を専門としない社会人は、科学的な知識よりも、社会問題との関連性を熟知していることが多い。事実、今回の生命倫理のテーマは、社会人の方から取り上げてほしいという要望があったものである。

教養科目として生命倫理を取り扱う場合には、専門的な知識を習得させるという観点ではなく、幅広い観点から社会問題との関連で取り扱う方が、多くの学生の実情に適合し、議論のテーマとして成り立ちやすい。教員は、学生の間での基礎知識の共有度が気になるのに較べると、社会人の方が率直に議論に入りやすい面がある。

### ⑥戦争問題における世代間意見交流

太平洋戦争の問題は、日本の歴史の中でも最も重要な事項の一つであるが、今日の初等中等教育における歴史の授業の中で十分に時間をかけて取り扱われているとは言い難い。初等中等教育で使われている教科書の記述も表面的で、特定の事項の記述に留まっている。また、大学教育の中でも、この問題を取り扱う授業は極めて限られている。

様々な観点から福祉問題を考える時、その対極にある戦争問題は、多くの面で教訓的な示唆を与えている。学生は歴史を暗記科目と捉える傾向が強く、太平洋戦争に関しても断片的な知識しか持ち合わせていないことが多い。歴史を自らの問題

として捉えるためには、その事項に関わった人間が存命している太平洋戦争は好適な教材である。直接的に戦争に関わった世代の多くは、既に80才を超えており、直接体験を聞く機会を逃す可能性も年々高まりつつある。定年退職を迎えた社会人は、何らかの形で戦争を経験している人が多く、その雰囲気や学生に伝えることで、文字から得る情報よりも遙かに現実に近い声を聞くことが期待できる。

表1に示すように、太平洋戦争の引き金になった日中戦争の原因を考えることを、本授業では課題とした。実際には多くの要因が複雑に関わっていると考えられるが、学生はどのような捉え方をしているかを見るのが今回のねらいである。

実際、学生の意見は様々に分散した。天皇、軍隊、マスコミなどが主なキーワードであるが、歴史は過去の遺物ではなく、その流れは現代に通じるものであることを感じる事が重要である。学生よりも古い時代から現代まで生き抜いてきた社会人の存在は、学生にとって貴重な生き証人でもある。これまで語る事のなかった体験を授業の中で後生に伝えることを決意した地域社会人がこのような授業に参画することが実現できれば、新たな展開が期待出来よう。

### ⑦戦後史と日本国憲法問題

改憲問題が今日的課題の一つと考えられるようになったが、これまで「憲法とは何か?」「近代国家とは何か?」という基本的問題を考える機会を持った学生は少ない。憲法問題は、ある意味では抽象的な問題であるために学生にとって印象が薄かったようである。憲法は表現が抽象的であることから、これを考えるための素材として活用するには、関連した基礎知識が重要である。また、基本的人権の問題などは、当たり前であるという印象から、その重要性に気づくことは難しい。

社会経験の豊富な社会人は、学生の感じている当たり前という印象は、必ずしも正しくないという事実を体験的に熟知している事が多い。その体験から自然と語られることで、学生の側にも素直に受け入れやすい雰囲気が出来る。学生の感性に語りかけることは、教員にとってもかなりハード

ルが高く、一方的に押しつける状況も起こりがちである。地域社会人が学生となるべく同じ目線で経験を語りかけることにより、伝えることが可能な事項が、憲法のような抽象的な印象を持ちやすいテーマには、特に多いと考えられる。

### ⑧ものづくりに関して

ものづくりに対するモチベーションを高めるためには、適切なテーマで学生の能力に応じて適切な目標設定が出来る必要がある。また、試行錯誤の結果により自らの目標とするものを完成させたことに対する達成感を得られることが重要である<sup>(4)</sup>。ものづくりの過程において、試行錯誤を繰り返しながら少しずつ進歩を重ねることが、知識を深める機会になる。むしろ失敗の経験が、成功の経験よりも大きな意味を持つ。失敗の経験が次に必要な知識を学ぶモチベーションとなるために、この繰り返しは重要な意味を持っている。

試行錯誤の過程や、同様な事に取り組んでいる他人からの刺激は、自身の知的ネットワーク形成に大きな役割を果たす。このような、試行錯誤の後の達成感とその過程の努力により得る知識のネットワークの広がりや、教養を学ぶことと性格的に近いものである。特に時間的な制約の多い共通教育の授業時間に取り扱うものづくりのテーマとしては、簡便なテーマであることが求められる。

さらに、グループ内のつながりだけでなく、グループ間の適度な関係の存在も、知的ネットワーク形成のためには必要である。学生にとって教員より身近な社会人の存在は、グループ間のコミュニケーションやグループ内の円滑なコミュニケーションの輪の存続に大きな役割を果たすことが出来る。とりわけリーダーシップの欠除などグループ内のコミュニケーションに問題のあるときには、社会人が機会を見て示唆をすることなどにより、授業の円滑な運営に大きな役割を果たす。学生にとって身近な存在の社会人は、単にグループに対して示唆をするだけでなく、場合によっては一時的にグループの一員となり、議論の方向性について例示することや、議論の方向性を修正することが可能である。たとえ社会人からの意見が自分たちの考えと異なっていた場合でも、教員から指示

されるよりは、その異なった考えを自分たちの考えの延長線上に置きやすい。その結果、達成された成果については、満足度の高いものになることが期待される。

目標を立てた上で、実際にある程度以上のレベ

ルまでその目標を達成することは、ものづくりに対するモチベーションの高揚に大きな役割を持っている。このようなグループ活動をサポートするために、社会人が必要に応じて適宜グループ活動に加わることは、大きな意義があると考えられる。

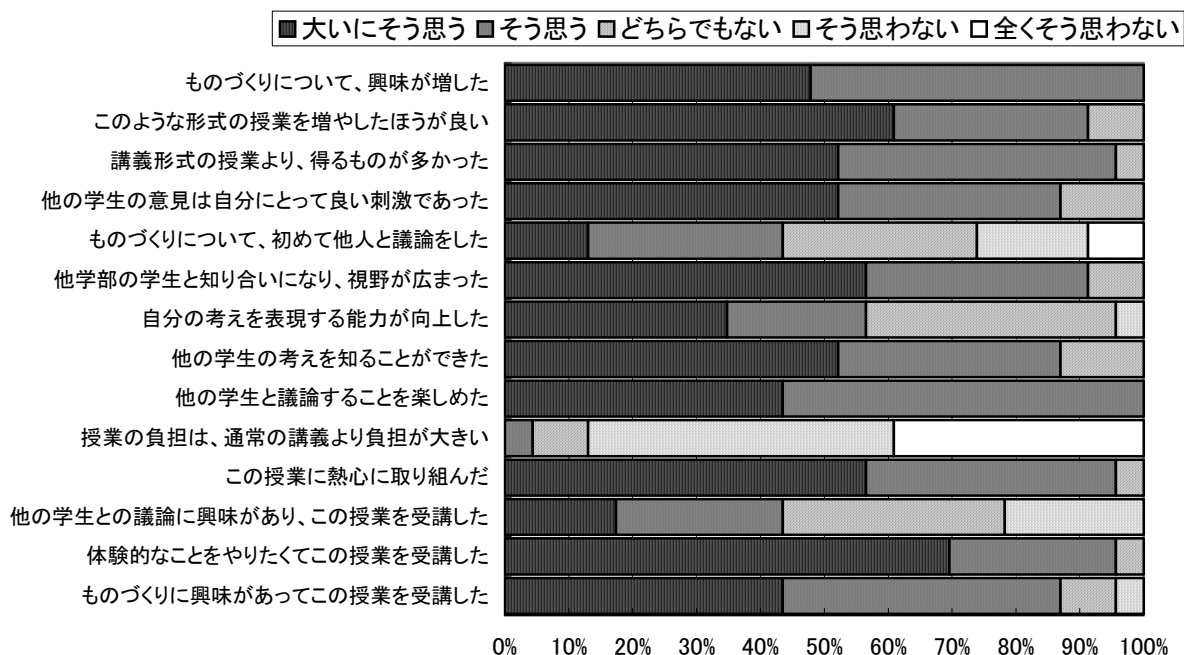


図3 共創型学習『「つたえること」と「ものづくり」—あいのメッセージ—』のアンケート結果

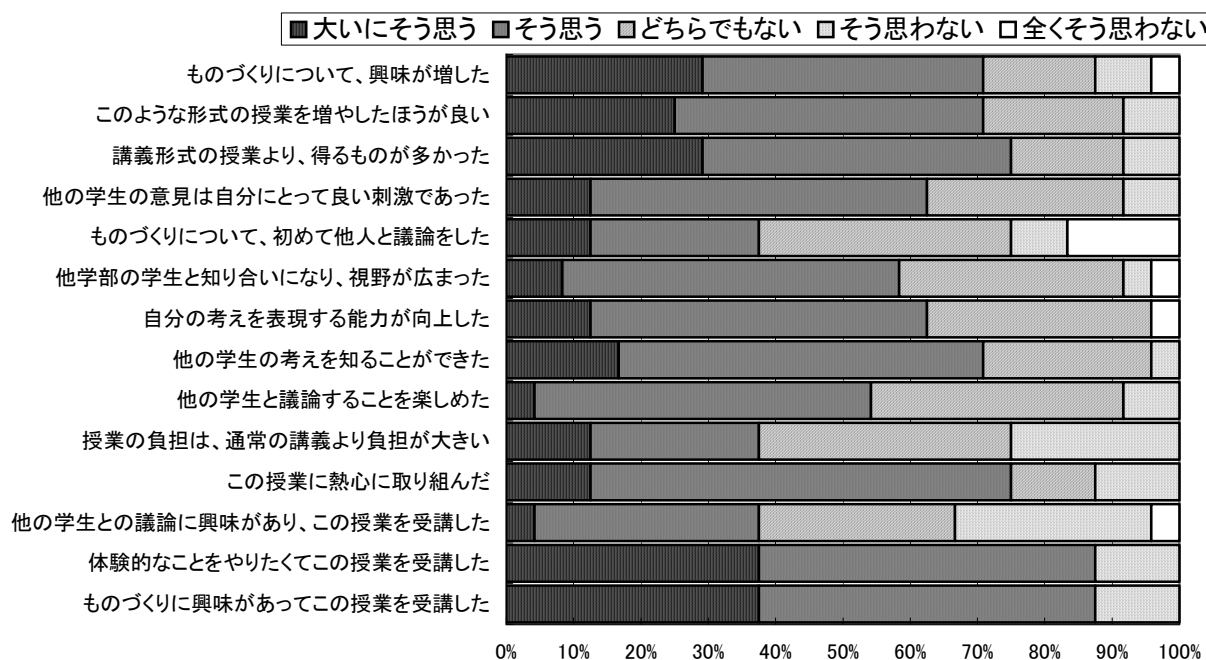


図4 共創型学習『「つたえること」と「ものづくり」—科学で遊ぼう—』のアンケート結果



### ⑨開発途上国での学校教育

開発途上国においては、一般的に教員の数に絶対的に不足している。また、理科における実験設備やその他の実技系の設備が不足している。さらに、児童が教科書を所有していないことも多く、授業は教員の板書を書き写す知識伝達型に偏りやすい。

このため、授業は実生活に必要な知識とはかけ離れたものになり、児童の興味を失わせる原因にもなっている。体験型の授業の導入は重要な課題であるが、必要な設備や教員の増員は困難である。また、教員自身も体験型授業の経験が無く、自身の教員養成課程でもその方法論を持ち合わせていない場合もある。一方、専門的な知識を持った定年退職者でも再就職は難しく、生まれ故郷の村で余生を過ごしていることもある。

今回授業で取り上げたマラリアは、種類によっては死に至る感染症であり、全世界で年間約200万人の人が亡くなっている<sup>2)</sup>。ソロモン諸島国は世界有数のマラリアの高浸淫地であり、これが原因で亡くなる年少者が少なくない。このために、マラリア対策に携わっている専門家の数も比較的多い。しかしながら、同国においても縦割り行政の弊害が存在しており、例えば教員は教育省、マラリア対策は保健省の管轄というように分割されていることから、これまでお互いの交流はほとんど無かった。

今回は、ソロモン諸島国マライタ島ナモイナコ村立小学校(図5左上)において、共創型学習「マラリアを考える」の特別授業を実施した(図5右上)。地域に住むマラリア対策の専門家は、定年退職者ということで日常業務とは関係なく学校教育に参加をお願いすることができた(図5左中)。マラリアは、免疫力が十分でない小学生以下の年少者では、特に深刻な結果になるため、初等教育の現場で、マラリアに関する教育を行うことは重要である。

また、マラリアは、ハマダラ蚊によって媒介されるため、蚊の防除は同症の対策に極めて有効である。政府の予算が極めて限られている同国の場合、地域住民の自発的な努力を引き出すことが重要な課題となっている。

ハマダラ蚊の発生地は、比較的水のきれいな小川や池などに限られているために、地域でのハマダラ蚊の発生地を把握することは有効な手段である。そのために村内の地図を作成し、ボウフラ採集の結果を書き入して、村内のボウフラ生息地の地図を作成した。この地図を今後のマラリア教育の教材として活用してもらうことにした(図5右中)。

中等教育以上の教育を受けることが出来る子供の割合が低い同国では、初等教育の現場は、地域の教育文化の中心的役割を占めている。このように、初等教育の現場に地域に住む専門家や、一般の住民が集結し、マラリア対策の意義とその方策を共に学ぶことは、子供たちの健康教育のためだけでなく、地域住民全体の健康福祉に貢献するものとなりうる。また、媒介蚊の駆除に関することでは、同虫の幼虫であるボウフラの駆除が最も効果的である。このために、定年退職した地域のマラリア対策の専門家と一般の地域住民に小学校での授業の協力をお願いした。この専門家が特に得意とするハマダラ蚊のボウフラの採集では、児童たちだけでなく同行した教員にも大きな刺激を与えた(図5左下)。また、ボウフラ採集では、一般の地域住民も積極的な協力が得られた。採集したボウフラを顕微鏡で観察することにより、生物としての蚊に対する興味を深めてもらうことにした(図5右下)。

このような形式の授業は、同国では極めて珍しく、児童たちに対して大きな刺激を与えたということで、教員から今後の定期的な開催を要望された。

今回の取り組みのように、地域の社会人を活用することにより、限られた予算の中で児童や教員に対しての啓発だけでなく、地域の自発的なマラリア対策に対しても有効なプログラムとして働く可能性があると考えられる。一方、地域の定年退職後の専門家にとっても今回の授業へ参加することが、これまでの経験や専門性を生かす形で地域社会や地域の教育活動に参画する機会を得ることになったことで、教育活動への関心が高まったことが聞き取り調査から明らかとなった。

教員や地域保健に関する専門家の数が限られた

開発途上国では、ワークシェアリングの問題と定年退職者の活用をどのようにバランスをとりながら進めてゆくかのシステム作りが課題であるが、

地域によって教育環境が異なる場合が多く、地域の視点から新しい人材活用制度が出来ることが重要であると思われる。



図5 ソロモン諸島国における共創型学習

〔左上〕ソロモン諸島国マライタ島ナモイナコ村立小学校全景 主要な校舎は、伝統的なサゴ椰子を用いた建物である 〔右上〕授業の全体とマラリアに関する説明 〔左中〕地域に住む定年退職者によるボウフラ鑑別法に関する説明 〔右中〕グループに分かれて村内及び近郊の地図作成 〔左下〕地域住民を交えて、ボウフラ採集の実習 〔右下〕顕微鏡によるボウフラの観察

#### 4. 生涯教育の新しい展開の可能性

##### ①共有する学びの場と共通教育

定年退職者の増加と共に比例して、医療費や介護に必要な費用が増加することが懸念されている。生涯教育を通して高齢者の社会貢献の場を創生することは、このような社会情勢のもとでは重要な課題である。これまでの生涯教育は、一般的に学習の成果を生かす道が私的なものに限られることが多く、さらに高いレベルでの学びを求める人のための受け皿が必要となってきた。

現在の生涯学習は、講演会形式、カルチャーセンター方式及び自主サークルなどの形で行われるこ

とが多い。このような形式では同じ世代の中での共創の要素がないとは言えないが、基本的には閉じられた世界での自己完結型であり、更なる発展のためには、世代間交流が必要と考えられる。生涯教育においても、勉学において得られた結果を社会還元する道があることにより、勉学の目的を明確化できるため、モチベーションの高揚が期待できる。また、知的資産の有効利用としても、このような生涯教育の発展が必要と考えられる。

今回の試みのような教育ボランティアは、世代間交流を通して共に学び合う共創という一つの目標を目指してお互いに刺激し合うことが主な目的

であるが、この授業のために必要な予備的学習に対するモチベーションの高揚が期待される。次の授業において、お互いに独習の成果を披露することにより、更なる共創の効果が出る事が望まれる。このように、共創型学習科目への社会人の参画は、新しい形式の生涯教育の可能性を提起している。

## ②生涯教育と教養教育

生涯教育の主要な柱は、自らの教養の幅を広げることにある。一方、学生にとっては、教養教育の意義を大学初年次に見いだすことが重要であるが、必ずしも容易でない。この問題を解決する一つの手段として、社会人の教養を学ぶ姿を学生に見せることが考えられる。

教養教育の目的の一つは、知識の活用を学び、新たな問題提起を自身から出来るような能力を育成することである。そして、これをきっかけとして、主体的に学ぶことの重要性に気づくことにつながると思える。

その第一歩として、既に持ち合わせている知識を、現代社会の諸課題の一つに当てはめて、その知識を展開させてゆく方法が考えられる。例えば、ある課題を与えたのちに、グループディスカッションなどの時間を設定することにより、学生が他の学生の様々な意見を聞く機会となり、各学生はこの時間を利用して自分の持ち合わせている知識を他の学生の知識と比較することを自然な形で行いながら、課題となっている問題との関連づけを行うことになる。社会人と学生が学びの場を共有することにより、異なった世代の視点からの考えを、直接知ることが出来る。様々な考えをもとにして、知識のネットワークを構築することの経験を積み重ねることにより、学ぶことの楽しさと共に、知識の活用法を学ぶことになる。

一般に社会人の意見は、学生の意見とは異なった視点を有している。学生の意見をつなぎ合わせることは異なった向きに知識のネットワークを構築することが必要であり、それによって、より柔軟な考え方が生まれてくると思われる。

その結果出来た知識のネットワークは、3次元的な広がりを持つようになる。学びに対する高揚

した雰囲気出来るような意思疎通の形成が課題である。共創型学習への社会人の参画は、適度な課題を設定することにより、社会人と学生両者にとって優れた学びの場を提供出来る可能性がある。

## ③読書のモチベーションとして

最近、生涯教育の場として、各地域に図書館が充実されてきた。また、大学図書館も社会人に門戸を開くところが増えてきている。

その一方では、パソコンの普及により、インターネットが多用されるようになった結果、学生の読書量がとみに減少している。また、マークシート式の試験が多くなったことや、効率良く得点をとるための学習法の普及により、断片的な知識の暗記が学習の中心になり、知識活用の方法を学ぶ機会が少なくなった結果、体系的な知識体系が出来ていない学生が目立つようになってきた。

読書は、知識を体系化するために、欠くことが出来ない手段と考えられる。現実には、暗記中心型の学習法を身につけた学生にとっては、読書を苦手とする傾向が強い。本の活字にとらわれて、内容の理解が伴わないまま、途中で挫折する経験を持つことが、読書に対する苦手意識が植え付けられる。

読書は、各自の頭のなかで体系化された知識から、さらに未知の世界へ創造力をふくらませることが期待されるため、創造性の涵養にも極めて有効である。社会人と共に学ぶ共創型学習において、知識のネットワーク構築の重要性に気づくと共に、社会人から出てくる意見が読書により培われたものであると感じることは、読書の意味を自然な形で知ることにつながる。通常の講義形式の授業や放送メディアによる学習では、学生は受動的な態度に終始する傾向が強く、能動的学習の重要性を学ばせることは、困難な面がある。

またインターネット上の情報の氾濫は、能動的な学習に必要な努力をする前に情報が目の前に現れる様な状況になっており、能動的な学習姿勢が身に付くかは疑問である。キーワードの入力という簡単な手段で手に入る情報量が氾濫しているため、情報の質を見極める能力が重要となる。しかし、質を見分ける能力を身につける前にインター

ネットでの情報収集が習慣化すると、コピーした情報を羅列する悪習慣が真の学習機会を奪うことに注意する必要がある。このように、受動的な学習姿勢という状態から抜け出せない学生の増加とインターネット環境の整備は関連していると思われる。インターネットによる情報収集に対して、本を用いた情報の収集は能動的な活動が必要であり、インターネットとは違った能動的な学習に対するモチベーションが必要である。

社会人にとって、学生と共に学ぶためには、これまでの蓄積だけでなく、授業のテーマに関連した知識を、自らの努力で本から得る必要が出てくる。このような機会を積極的に持つことにより、あるテーマに絞った読書に対するモチベーションが高められることになることが期待できる。

#### ④学生と共に高めあう能動的学習姿勢

これまでの生涯教育では、講義形式の授業、演習や体育系の実技などが中心であり、受動的な学習スタイルが主流であった。しかしながら、積極的に地域社会への貢献をするための生涯教育も必要な時代になってきている。今回の社会人参画型の共創型授業は、生涯教育の新たな学習スタイルの可能性を示唆している。生涯教育が能動的になることが、学生にとっても刺激になり、学ぶことの意味を考えるきっかけとなりうる。

共創型学習においては、能動的な学習態度が不可欠であり、実際に能動的な学習を行っている社会人が参画することにより、学生への刺激が自然な形で実現行われることが期待できる。共創型学習においては、自らの考えを発言することを重視しているために、限られた時間の中で得られた新たな情報を元に、頭の中に持ち合わせている知識のネットワークを再構築し、さらに発展させた知識のネットワークを自らの言葉にまとめ上げる必要がある。

このような、知識のネットワークの再構築を繰り返すことにより、知識のネットワーク構築能力の向上が行われるが、視点の違った社会人の意見と学生の意見を組みあわせることより、このネットワークの再構築は質的な多様性をもたらす効果が期待できる。このような経験は、受動的な学習

では得られない勉学に対する満足感につながると考えられる。また、総合的な理解につながるような思考力の育成は教育の今日的課題であるが、知的ネットワークの構築能力の涵養や能動的な学習は、思考力育成と関連が深い面がある。

今回の取り組みである社会人参画型の共創型学習は、社会人と学生が共に高めあう能動的学習法のひとつであり、社会人の生涯教育と学生の教養教育に有効であると考えられる。

#### 5. 今後の社会人活用の課題

現在、共創型学習『身近な福祉を見て・知って考えてみる』『「つたえること」と「ものづくり」—科学で遊ぼう—』『「つたえること」と「ものづくり」—あいのメッセージ—』『身近にあるゆつたりもの—方言—』などにおいて、社会人を活用した授業を展開している。地域の課題や創作活動などのテーマを設定して、異なった専門性を志向する学生がお互いにコミュニケーションを行いながら思考を深めてゆく学習形態は、創造力の涵養や、他分野への関心を深め視野を広げることへのモチベーションとなる。

大学のユニバーサル化に伴い、一般の講義形式の授業においては、異なった基礎学力を持った学生が理解できるような授業形式を創造してゆく必要がある。特定のテーマを設定してコミュニケーション中心の授業形式を看板とした共創型授業では、様々な専門分野や基礎学力レベルの学生であっても、社会人の参画により一つの学習集団を形成できる可能性がある。

実際、様々な学部、学科の学生が集まり、コミュニケーションを取りながら思考を深めてゆくことに対して、6—9割の学生が肯定的な評価をしている(図2—図4、他の学部の学生と知り合いになり視野が広まった項目)。授業の成果が目で見えやすいことが、達成感につながり、7—9割の学生が、このような共創型学習形式の授業を肯定的に見ていることに関係していると考えられる。また、世代の異なる社会人が授業に参画することにより、授業の場がより一般社会に近づくことになるために、学生にとって実社会に近い場での教育効果が期待できる。さらに社会への適合性を高

めるためには、創造性の育成が重要な課題となる。創造性の育成に関して、中戸<sup>(5)</sup>は「人間本来持っているはずの創造性、人間性の発達に関する潜在的な能力が、今日のような文明社会では人間の知識やもののあり方の現実に隷属する形となり、人間本来の力を発揮できない状態になる」と指摘している。

今回の授業では、なるべくシンプルな環境の中から学生自身が創意工夫をする中で、教員ではなく社会人が学生よりの立場に立ってアドバイスをすることで、人間本来の力である創造性を引き出すように心がけた。学生の高い満足度の中には、このような自身の成長に関する実感も含まれていると思われる。

社会人参画の授業を企画するには課題もある。今回のように社会人が共創型学習の授業に参画して、授業の活性化につなげるためには、ある程度の専門的知識と幅広い教養性を持ち合わせていることが必要なこともある。授業のテーマは一応設定されているものの、話の展開によってはテーマが広範な領域に及ぶため、柔軟な対応が必要となる。また、学生の側も社会人に対して、教員とは異なった視点や専門性を期待することがある。そのために、このような授業に参画できる社会人は限定されることになり、適切な人材の確保の方策が重要である。

今後は、地域社会で対応できる社会人の層が厚い領域での共創型授業プログラム開発が必要である。一般的に地方の大学においては、地域に根ざした大学としてその地域の歴史と文化を学ぶための教育プログラムの必要性が高い。このような教育プログラムにおいて、地域社会人を活用した共創型授業の導入を推進し、その内容を充実させてゆくことや、恒常的に社会人が参画出来るような人材活用システムを構築することが今後の課題である。

## 6. おわりに

平成20年度より、徳島大学大学開放実践センターの公開講座において、「名著講読」「地域のボランティアリーダーと語ろう!」「学生と社会人による授業企画ゼミナールー大学で何を学ぶの

か?」などの全学共通教育科目に大学教育ボランティアとして参加するための講座を開設することになった。社会人に対してオリエンテーションを行った後に、学生の授業に合流する形式で、学生と共に学びを深める生涯教育講座が始まることになる。今後授業内容や科目の検討を積みかさねて、このような講座のさらなる発展を目指す予定である。

## 謝辞

この研究は、平成18年ー平成19年徳島大学学長裁量経費「社会人講師活用による共創型学習の展開ー人間力の育成をめざす初年次教養教育ー」の補助を受けた。また、ソロモン諸島国における共創型学習の実施は、平成19年度国際医療協力研究委託事業(19公1)の一環として実施された。この授業の企画について、ご支援いただいた全学共通教育センター長 佐野勝徳教授、大学開放実践センター長 曾田紘二教授、同センター 廣渡修一教授に感謝する。

## 参考文献

- (1)大橋 眞、斎藤隆仁、佐藤高則、中恵真理子、田村貞夫「ものづくり」と大学初年次教養教育における創造力育成プログラム 大学教育研究ジャーナル 4:1-12, 2007
- (2)石井明、渡部円、大橋 眞 マラリア 臨床と微生物 34(4):323-328, 2007
- (3)大橋 眞、川端真人 LED マラリアプログラムーLEDライトボックスによる顕微鏡マラリア診断術向上と啓発活動プログラムー 国際保健医療 22(2):95-98, 2007
- (4)大橋 眞、村主節雄、川端真人、石井明 LEDライトボックスと顕微鏡を使ったソロモン諸島国のマラリア流行地の小学校におけるマラリア学習プログラムの試みーLED マラリアプログラムの展開ー 印刷中
- (5)中戸義禮『創造性を育てる学習法』大学教育出版P17-35 (2001)